



独自性のある建築を行ってきた一級建築士事務所カクオ・アーキテクト・オフィスのアトツギである、松村 英史さん。所長である父の建築を AI に取り込んだ「KAKUO AI」を開発し、アトツギ甲子園では準ファイナリストに選出されました。そんな松村さんの AI や建築の未来に対する想いをお届けします。

## 1. AI 開発への想いから家業へ入社

**家業を継ぐという意識は、幼少期の頃からお持ちでしたか。**

元々は家業で働くという意識はしていませんでした。

大学は建築学科に進学しました。在学中にいろいろな設計事務所にインターンに行かせてもらい、建築の流れや知識を学びました。設計の進め方によってスタッフが疲弊する姿なども見てきた中で、「何か自分にできないか」と考えました。そんな頃に、定期購読していた「建築知識」という本で AI についての話を目にし、「これなら建築の未来を変えることができるのではないか」と思ったんですね。

建築設計の分野で AI に挑戦させてくれる会社を探した時に、自社でなら実現できると思い、社長である父に相談しました。すると、「1 度挑戦して成果を出せば、それを広めていけたらいいのでは」という話になり、取り組みが始まったのがきっかけでした。家業を継ごうと考えて入社したというよりは、AI に取り組むことを考えて自社を選んだ形です。

建築学科に進学するという決断は、ご実家が建築に携わっていたことが関係していましたか。

実家が事務所であるため、幼いころから日常的に設計スタッフを見ていました。そうした環境で育っていると、僕の頭の中が自然と建築脳になっているんですよ。

父がユニークな建築を手がけているので、父の建築を超えられたらもちろんいいですが、最初は父の元で学ぶのが最適だと考えました。

## 2. アトツギならではの方法で父の考えを AI 化



入社当初は、どんな仕事をしていましたか。

入社当初は Instagram やホームページの広報を担当していたのですが、そこで海外の AI 技術を見る機会があり、AI の作り方を理解しました。CG も得意だったので、『もしかしたら AI 画像も作れるんじゃないか?』と思ったのが始まりでした。入社してからは Instagram やホームページの広報を担当していて、そこで海外の AI 技術に触れる機会があり、AI の仕組みを少しずつ学んでいきました。うちの事務所はもともと 3DCAD や VR などの技術に強

かったので、そういった土台を活かしながら、仕事の合間に AI の勉強を続けて、最終的に『KAKUO AI』を開発することができました。

**AI を作る際、こういった経緯で「お父様の建築を再現した AI」というアイデアになったのですか。**

AI を構築していく中で、思わず見入るような AI 画像にはしっかりとしたコンセプトが重要だと思っています。軸になるものがなければ、AI の出力があいまいな印象になってしまうと感じました。そこで、父の建築哲学や考え方を取り込むことで、問題が解決できるのではと考えたことが「KAKUO AI」を開発したのがきっかけなんです。

お父様の建築哲学やアイディアはどうやって再現したのですか。

一般的な企業ではなかなか難しいことかもしれませんが、所長である父とは日頃からマンツーマンで『どんな考えを持っているのか』をじっくり話し合う時間を大切にしています。AI に正確に学習させるためには、僕自身がまず父の考えを深く理解し、それを AI に伝える役割を果たす必要があります。こうした密なやり取りができるのは、アトツギという立場だからこそだと感じています。

単に画像を読み込ませるだけではなく、「こんなデザインがいい」「こんな家具を使いたい」といったニュアンスも全て言語化して取り込みました。

### 3. AI で説得力アップ＋工程を短縮

**「KAKUO AI」を使うと、こういったプロセスで設計ができるのでしょうか。**

実際の業務での例を出すと、「京都の屋上で景色を眺めながら美味しいビールを飲むルーフトップバーの空間を作成して」という要望を AI で形にしたことがありました。AI にそういった条件を出した上で、敷地条件を入力して、画像を出してもらいます。AI が生成した画像の中から、お客様に検討していただける画像を選択していくのが僕たちの新しい仕事で、そこにセンスが問われるのではないかと考えているんです。

AI が出力した中には建築物としては成立しないような画像は出てきますが、設計事務所としての知識があれば、成立しないものはわかるんですね。そういったものを取り除き、お客様にお見せしています。

イメージ画像を打ち合わせの段階でお見せすることができるという効果は大きいです。

今までは、図面や模型を作る段階ではお客様には完成イメージが見えない。作った後で提案して、イメージと違うと分かったら、そこまでの模型や図面は全部やり直しになってしまいます。お客様の意向に沿ってデザインを持っていくと、ズレがあまりなく、お客様との方向性も一致して説得力が上がってきました。また、完成イメージからの逆算思考で動くことができるようになり、工程がかなり短縮されたんです。

これからは、他の建築事務所などとの協業も積極的に進めていきたいと考えています。その中でよく耳にするのが、「図面は描けるけれど、デザインの部分が物足りない」といった声です。そうした場面では、私たちがデザイン監修の立場で加わったり、一緒にコラボレーションしたりできる体制を整えています。たとえば、あるマンションの案件では、通常2〜3ヶ月かかっていたデザインの工程を、私たちが関わることで1ヶ月程度に短縮することができました。

**お父様に「KAKUO AI」のアイデアを聞いてもらった時の反応はどうか。**

「建築家にはさまざまなコンセプトを持つ方がいますが、父である所長は「新しいものが好きな建築家」だと思います。常に最先端の技術や新しいアイデアを取り入れながら設計を進めていくスタンスで、AIについても、むしろ父のほうから「やってみたら？」と背中を押してくれました。そんな前向きな空気の中で、楽しく取り組むことができたのが大きかったと思います。

## 4. 「〇〇らしくない建築」

**お父様から受け継いでいる考えや変わっていないことはありますか。**

建築で未来を設計する新手法としてAIが出ましたが、今までも常に「〇〇らしくない建築」という意外性を会社の核としてきました。そういった経験や知識は蓄積しているので、他の建築家との差別化を図ることができる部分だと考えているんです。思いもよらないところをかけ合わせるような、そんな未来を僕たちも作って挑戦していきたい中で、このAIによって新しい可能性ができたのではないかと思います。

最近は、僕自身が建築以外の分野にも興味を持ち、まるでアーティストのように自由にものづくりをすることも増えてきました。そんな中で、父がそれを建築の文脈にうまく軌道修正してくれる場面もあり、いまは父がプロデューサー的な立ち位置で、僕が建築の可能性を広げていくような、そんなタッグで取り組んでいます。

親子でこんなふうに活動している例はあまり見かけないので、自分たちでも面白い関係だなと思っています。デザインについても遠慮せずに意見を言い合えるのは、親子だからこそ築ける関係だと感じています。

**お父様の建築の独自性を大切にしている印象がありますが、理由はありますか。**

父の会社である以上、やはり父が描くビジョンを形にしていくことが自然だと思っています。ただ、AIを開発した時点で、実は自分がつくりたい空間のイメージもすでにその中に落とし込んでいるんです。誰も気づかないくらいの細かな部分かもしれませんが、「この素材を使いたい」「この家具を合わせたい」といった自分の好みや理想も、AIの設計プロセスにしっかり反映させています。結果として、父の建築の世界観と自分の理想が自然に融合したAIが出来上がっている、そんな感覚があります。





## 5. アトツギ甲子園への挑戦で仕事の繋がりを

入社してから今までで、最も乗り越えることが難しかった困難は何ですか。

常に試行錯誤の連続ですが、中でも AI を形にするまでが一番のハードルでした。

父の考えをしっかり理解した上で、それをどう未来の設計に落とし込み、AI に反映させるかが課題だったんです。父と対話を重ねながら、その思考に少しでも近づき、理想に沿ったデザインを導き出す作業には、かなりの時間をかけました。

まだ完成とは言えませんが、自分なりに正解に近い形が見え始めている感覚はあります。もちろん大変なことも多いですが、それ以上に面白くて夢中になってしまうので、あまり「苦労」としては感じていない部分もありますね。

アトツギ甲子園に出場するきっかけは何でしたか。

信用保証協会の担当者の方から、「こんなに AI に注力しているのだから社会に広めては?」  
と一言いただいて、出場を勧められました。今の自分が話せるのであれば、挑戦するべきだ  
と思ったので、挑戦したという経緯です。

出場した後は、友人や、アトツギ甲子園に出場していた他社の方から声をかけていただく機  
会がありました。

AI について詳しくない方にも、アトツギ甲子園でのピッチ動画がちょうど良い説明代わり  
になっていて、ブログなどで「ぜひご覧ください」と発信したところ、多くの方に見てもら  
えました。

その結果、「一緒に仕事をしてみたい」といった声もいただくようになり、決勝には進出で  
きなかったものの、仕事につながるご縁が生まれたという意味では、とても良い機会になっ  
たと思っています。

## 6. 建築以外にも建築家や AI を

**今後の事業承継の予定と事業展開を教えてください。**

今後は、設計業務と AI 業務の 2 つを、同じ会社の中で明確に分けて展開していきたいと考  
えています。建築で未来を設計する軸と、AI で未来を設計する軸を並行して進めながら、  
それぞれの分野で可能性を広げていければと思っています。事業承継も見据えつつ、まずは  
社内での体制を 2 つの柱に整理していくことが、次のステップだと考えています。

事業展開については、デザインにお困りの方や、デザインを必要としている企業の方々とつ  
ながっていきたいと考えています。私たちは、1 週間ほどお時間をいただければ、すぐにご  
提案をお出しできるスピード感が強みですので、そこを活かして、より多くの方のお役に立  
てればと思っています。企業とのコラボレーションや住宅などの設計業務については、広報  
の面でも積極的に発信していきたいと考えていますし、同時に講演会などを通じて、AI の  
取り組みについても多くの方に知っていただく機会をつくっていかれたらと考えています。

AI の学習には、父が聴く音楽など、建築以外の情報も幅広く取り入れているため、たとえ  
ば商品の開発など、建築以外の分野にも活用することが可能です。

今後、建築家が建築の仕事だけでは生活していけなくなる時代が来たときに、次の立ち位置は「プロデューサー」のような存在になるのではないかと感じています。たとえば、建築家が商品開発に関わるような機会が増えたとき、あらかじめ AI にコンセプトがしっかりと学習されていれば、お客様のイメージを形にしやすくなると思うんです。

将来的には、建築以外の分野にも AI の活用を広げていきたいと考えています。素敵なアイデアを空間や商品で表現していく、そんな新しい取り組みを、所長も僕もとても楽しみにしていて、ぜひ実現させたいと考えています。

AI が考えるというだけではなくて、僕たちは人が選択するセンスを売りにしていきたいんです。今後類似の AI はたくさん出てくるでしょうが、その最前線として、AI と人の能力を掛け合わせていきたいですね。